

岡田英弘「歴史とは何か」を読んで

岩村 益典

日本の文藝春秋から 2001 年に発売された岡田英弘著「歴史とはなにか」について、筆者の感じたことを紹介したい。もとより、本書のすべてを紹介できるわけではない。その作業は、今後の課題としたい。本書は、一般読者向けに書かれた本で、従来の学説とは異なった岡田の理論がわかりやすく記載されている。学校で歴史の授業を受けただけの読者には大きな衝撃を与えるであろう。

關於從日本的文藝春秋 2001 年發售的岡田英弘著「歷史是什麼」這本書，我想加以介紹。本來，並不是能夠介紹全部的本文，那個工作，我想作為今後的課題。這個書的對象是一般的讀者；與以前的學說有差異的岡田的理論，被易懂地記載了下來。對只是在學校接受歷史授課的讀者，他給予大的衝擊。

キーワード(關鍵詞): 歴史 国民国家 中国 民族国家 探偵 支那

はじめに

筆者は、現在、国立台湾師範大学歴史研究所に身を置いているが、元来、法学部の出身である。そのため、いわゆる歴史理論に関して本格的に勉強したのは、歴史系に移ってからである。その際、様々な歴史理論に関する書籍を読んだが、今回はその中で日本の文藝春秋から 2001 年に発売された岡田英弘著「歴史とはなにか」について、筆者の感じたことを紹介したい。もとより、本書のすべてを紹介できるわけではない。その作業は、今後の課題としたい。

内容の概略

まず、今回紹介する「歴史とはなにか」は、出版社「文藝春秋」、出版年 2001 年、ISBN は 4-16-660155-5、価格は日本円 690 円である。

筆者の岡田英弘(おかだひでひろ)は、1931 年生まれ、専攻は中国史、満州史、モンゴル史、日本古代史。東京大学文学部卒業、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授を経て、現在、東京外国語大学名誉教授である。

本書の内容は大きく分けて、3 部から構成され、次のようになっている。

第 1 部 歴史のある文明、歴史のない文明

第 2 部 日本史はどう作られたか

第 3 部 現代史のとらえかた

以上のように、本書は難しい学術書ではなく、一般向けの新書版として発売されたもので、内容も体系的であるというわけではなく、むしろ筆者である岡田の興味と関心に基づいて、のびのびと語られている感じがする。

本書の内容から、興味深い項目を取り上げてみると、次のようになる。

- ・歴史は科学ではなく、物語であり文学である。
- ・インド文明は「歴史のない文明」である。
- ・「中世」という時代はなく、あるのは現代と古代だけである。
- ・資本主義経済はモンゴル帝国が世界に広めた。
- ・フランス語は人工的に創り出された言葉。

- ・ 19世紀まで「中国」はなかった。
- ・ 文献どおり読めば邪馬台国はグアム島あたりにある。
- ・ 神武から応神までの歴代天皇は実在しない。
- ・ 日本は7世紀の建国から幕末までずっと鎖国をしていた。
- ・ 『古事記』は日本最古の歴史書ではない。

本稿では、本書中のすべての事項について述べるのではなく、筆者が国立台湾師範大学で勉強した歴史理論との関係で感じたことを示したい。

歴史とは

岡田は、「歴史とは、人間の住む世界を、時間と空間の両方の軸に沿って、それも一個人が直接体験できる範囲を超えた尺度で、把握し、解釈し、理解し、説明し、叙述する営み」(本書 p.10)と言う。そして、歴史を成り立たせる四つの要素として、次の4つを示す。

- (1) 直進する時間の観念
- (2) 時間を管理する技術
- (3) 文字
- (4) 因果律の観念

以上の要素を利用して、岡田は次のように議論を進める。

・ 歴史は自己(民族・国家・政府)の立場を正当化するという機能がある。その意味で、古代に歴史があるのは中国文明と地中海文明であった。それぞれ司馬遷『史記』、ヘロドトス『ヒストリアイ』が出发点になっている。

・ ヒストリーの語源となった、ヘロドトスの『ヒストリアイ』は……アケネメス朝ペルシャの発展とその征服地周辺の習俗をまとめた調査報告書。世界は変化するものであり、その変化は2つの政治勢力の抗争

から生じる。2つの勢力とはアジアとギリシャ（ヨーロッパ）という永遠の宿敵である。

- ・インドやアメリカ文明には「歴史はない」。それはなぜか、インドには輪廻転生思想がある。この思想では、前世が原因、今生が結果、今生が原因、来世が結果となる場合があり、人間界の出来事だけを記録しても、因果関係の説明ができない。従って、歴史があるとは言えない。

- ・イスラムも、すべて一瞬一瞬は神が決定するため、歴史はない。しかし、地中海文明との対抗上、自己正当化の手段として歴史を持つようになった。これを「対抗文明」と呼ぶのである。

- ・中国の歴史観と地中海の歴史観がぶつかる時から世界史が始まる。モンゴル帝国がユーラシア全域を支配することで、それまでの文明は一度ご破算になり、その後はモンゴル帝国の継承政権として各国が派生する。

- ・日本の歴史は、7世紀唐が中国を統一し、百済を滅ぼしたことから、始まった。倭人たちは、アジア大陸から追い出され、海のなかに孤立し、今にも唐軍が日本に攻めてくる危険があった。このため、倭国は結集し日本として、それまでの王を天皇として、中国皇帝の臣下ではなく、中国皇帝と同格だと主張した。

『史記』を手本とする中国各王朝の正史の発想を、中国との対抗上、持つようになる。「天下（治世範囲）の支配権を天命として前王朝から引継ぎ、唯一の皇帝（天皇）として君臨している」自己の正当性を「歴史」として残す、ということ。従って、『日本書紀』には、政治的な配慮があり、合理的解釈は不可能である。

- ・アメリカでは、ヨーロッパと異なり、歴史が意味をもたない。個人の意志と憲法によって「アメリカ人」となる。

以上の点について、ドレイの書籍にある「ある活動はモーリス・マンデルバウムが「社会的意義」と呼ぶものをもつのでなければ、歴史家の研究対象とはならない」という記述が印象的であった（文献3、p.7）。コリングウッドも記述しているように、筆者は歴史家の活動と推理小説

に登場する探偵の活動を対比したいと考えている。しかし、少なくとも、実際の事件では、事件が解決すべきものとして提示されるまたは現象として発生しているのであるが、歴史に関していえば、そもそも、それが解決すべき事件であるか、解決して意義のあることなのか、を問わなくてはならない、ということなのかもしれない。

「犯人が誰であつてもかまわない」という殺人事件の捜査にどの程度捜査の意味があるのか、ということか。

歴史は科学であるか。

岡田は、歴史は物語りや文学であつても、科学ではないと主張する。その根拠として岡田は、次の点を示す。

- ・ 科学は実験できる。しかし、歴史は一回しか起こらない。
- ・ 科学では、粒子の違いが無視され、法則こそ問題にされる。しかし、歴史では一人一人がみんな異なる。記述する人、読む人みんな個性を持っている。

この「歴史は科学であるか」という問題に関して、コリングウッドは、「科学とは、問題を提起して、それに答えようとする思考形式である。そして、事物を見いだすことである。その意味で歴史は一科学である。(文献 14、p.9-10)」「歴史の対象は、過去に行われた人間の行為である。(文献 14、p.10)」「歴史は人間の自己認識のためにある。以上は現代における歴史の意味である(文献 14、p.11)」と述べている。

要するに、科学の定義の問題に依存するようであるが、歴史が科学であるかどうかを議論する意味がより問われなくてはならないような気がしている。(その他、科学をヴィンデルバンドやリッケルトのように法則定立的と個性記述的とに2分したり、認識目標を普遍化的と個性化的とに2分したりすることには無理があり、むしろ認識しようとするひとつの現象のもつ普遍的側面と個別的側面とをともに明らかにすることこそが重要なのだ(文献 4、p.105)。

歴史を個性記述的科学に属するというヴィンデルバンドの科学論で

は、科学の統一的把握は不可能(文献4、p.121)。

中世はない？

岡田は、マルクス主義的「段階的發展説」を批判する。

「世界は一定の方向へ向かい段階を踏んで進化する」というのは、空想的な話。ダーウィンの進化論に触発された(本書 p.142)。マルクスの基本認識じゃ善悪二元論のヘロドトスやメシア思想の元であるゾロアスターと同じ。

参考として、歴史哲学を分類すると、普通には次の3つの理解がある。

- ・歴史は直線的パターンを有する
- ・循環的パターンを有する
- ・無秩序的パターンを有する(文献3、p.105)

思うに、マルクス理論の是非をここで問う気はないが、全体として段階的發展説を見たとき、發展段階の最終局面は別としても、筆者は、本書を契機として再度段階的發展主義を考察することができて本当に嬉しい。特に、昭和期に発売された台湾に関する書籍の中には、マルクス主義に基づくものもあり、本書はこれらの書籍を読む場合に役だったと言える。

用語法の問題

岡田によると、明治期に歴史を翻訳する際、中国式の歴史概念を流用したため誤訳が生じた、という。中国の「封建」とヨーロッパの「feudalism」という語は関係ない。

国民国家や民主主義

「国民国家」とは、国王の持ち物（領土）を市民が奪って、その帰属に困った挙句、「国民」の物にしようという発想でできたものであり、国民国家の軍隊は、組織し易く強いから欧州世界に広がった。

「民族」とは、Nationalism を「民族主義」と訳したのが最初で、本来は日本独自の概念。「民主主義」は、アメリカ革命（独立戦争をこう呼ぶ）を正当化する新理論である、と結論づける(本書 p.138 以下)。

19世紀まで「中国」はなかった。

「中国」の問題に関して、岡田は国民国家との関係で議論を進めていく。つまり、今の「中国」の意味は「中国という国民国家」を意味する、という前提で議論を進める。以下、岡田の議論を紹介しよう(本書 P187-P190)。

実際に中国ではじめて皇帝が誕生したのは、秦の始皇帝が、西暦紀元前二二一年に天下を統一したときであり、「中国」と言う言葉の意味は、「中央の都市」首都のことであつた。これが、「中国」の第1の意味である。

中国文明で世界を意味する「天下」は、皇帝の影響力が及ぶ範囲のことであり、いまで言う中国であるが、「一天下」には都市化した「中国」地帯と、都市化していない「蛮夷」地帯の二つが含まれていた。これが「中国」の第二の意味である。

今の「中国」の意味は「中国という国民国家」を意味する。清朝の時代には、満州人と漢人は皇帝に直接支配されていた。この二つの種族を総称して、満洲語で「ドゥリンバイ・グルン(dulimbai gurun)」と呼び、「まんなかの領民」という意味である。これを漢字に翻訳すると、「中国」になる。これに対し、皇帝と同盟関係にあつて自治を認められているモンゴル人、チベット人、東トルキスタンのイスラム教徒は、満洲語

で「トゥレルギ (tulergi)」と言った。これは、「そとがわ」という意味で、漢字に翻訳すると「外藩」、つまり「そとの垣根」になる。この満州語起源の「中国」が、「中国」の第三の意味である。

日本語の「支那」は、英語のチャイナ (China)」と同じ言葉である。秦の始皇帝がはじめて、いまで言う中国をつくったので、外国の人々は中国を「秦」と呼ぶようになった。漢字の「秦」の読みかたは、七世紀の隋の時代ではヅイン(dzin)、現代の中国語普通語)では「チン(chin)」であり、これがインドに伝わって「チーナ (Cina)」となり、ベルシア語では「チーン (Chin)」となり、アラビア語では「スィーン (Sin)」となった。

15世紀の末になって、ポルトガル人が大西洋からアフリカ大陸を回って、インドに到着し、そこで、東方にチーナという国があることを聞いた。このインド語の「チーナ」がポルトガル人の口から西ヨーロッパに伝わって、英語の「チャイナ」などになった。

1708年、シドッティというイタリア人宣教師が、キリシタン禁制の日本に潜入をくわだてて、屋久島で逮捕された。新井白石はシドッティを尋問して、聞き出した世界知識を『采覧異言』(1713年成立)という書物にまとめた。このなかで、新井白石は、イタリア語で中国を言う「チーナ (Cina)」を、漢字で「支那」と翻訳した。日本では中国を「支那」と呼ぶようになった。

19世紀の末になって、多数の清国留学生在が日本に押し寄せてきた。彼らは、日本人が日本では、漢とか、唐とか、明とかいう、歴代の王朝の名前にかかわらず、漢人の国を「支那」と呼ぶことを知った。

当時は民族主義が生まれつつある時代だったので、清帝国の支配者である満洲人から、本来の漢人の国を区別する「支那」という名前は便利だった。こうして「支那」という日本語が清国に伝わった。しかし、漢字は意味をあらわす文字なので、「支那」のような無意味空目訳はしつくりしない。そこで満洲語からの翻訳の「中国」を借りて、日本語の「支那」に当てたわけだ。

20 世紀のはじめに清朝が滅亡して、漢人の中華民国ができ、ここにはじめて、中国という名前の国民国家が誕生した。こうして「中国」は、現代のような「中国」という意味になったのだ。これが第四の意味の「中国」で、日本語の「支那」の言い換えである。

以上まとめると、岡田の言う「中国」には 4 つの意味があり、時期的に古いものから並べると次のようになる。

- 1・「中央の都市」首都のこと
- 2・皇帝の影響力が及ぶ範囲である「天下」のなかの都市化した部分
- 3・清朝期の満州人と漢人を意味する満州語の「ドゥリンバイ・グルン」つまり「中国」
- 4・国民国家「中国」：日本語の「支那」の言い換え

要するに、岡田の論は、「中国」と言う言葉が、現在のような用法、すなわち国民国家中国を意味するようになったのは 19 世紀以後である、という議論である。

歴史の主流は政治史

岡田は、歴史の主流は政治史である、という(p.158)。文化史、社会史、経済史だと言っても、それが歴史になるのは政治の出来事と結びつくからであって、政治を抜きにした文化も社会も、経済もあり得ない、と断言する。

思うに、先にも述べた筆者の歴史家と探偵との関係であるが、探偵の場合には、すでに解決すべき事件があるので、それを解決すればよいのであるが、歴史家そもそも何を対象とすればよいのか、筆者はそれを現象である、と考えている。つまり、「なぜ・・・」という問いから始まる疑問を生じさせる現象である。しかし、その疑問に価値がないなら、探求そのものに意味がなくなるであろう。その意味で、政治的な関連と

いうのは、それがあれば現象に研究価値が生じやすい、という意味はあるかもしれないが、だからといって、政治と関係ないなら探求する意味はないと断言はできない。とはいえ、筆者の経験上、最初は政治と関係ないように見えても、研究を進めていく過程において、政治と関係してくることがほとんどである。

個人である歴史家が、普遍性のある歴史を書く

場合の注意

岡田は、個人が普遍性の有る歴史を書く爲に注意しなくてはならない事項として、次の3つを示す(本書 p.217-222)。

- ・史料は、第一に、作者や作者が属している社会の好みの物語に従って整理されている。
- ・第二に、作者あるいはその社会が、記録する価値があると思ったことだけが書かれている。
- ・第三に、史料はすべて、何かの目的があつて記録されたもの。

以上の3点は、岡田の記述の基本となっている事項であり、今回は紹介しなかったが、古事記など神話に関する記述などにもその影響が現れている。

岡田の結論

最後に岡田の結論を紹介しよう。

「いまの世界には、国民国家どうしのあいだの衝突や、利害の対立があるが、少なくとも、公平な「よい歴史」が掛けてさえいれば、そういうものはかなり中和できるだろう。すくなくとも、いまの国民国家の時代である現代では、国民国家どうしは自分の国史を持ち出して、自分の立場の方に理があると主張しがちなものだ。そこに「よい歴史」があれ

ば、そういう対立は、お互い様と言うことになり、かなり解消できるだろう。これは本書の結論と言うことになる」(本書 p.222)

では、よい歴史とは何であろうか、岡田は「史料のあらゆる情報を、一貫した論理で解釈できる説明」(本書 p.220)である、という。

筆者の見解

ここで、筆者の歴史家と探偵の活動についての簡単な意見を紹介しておきたい。あくまでも未熟なもので理論とは言い難い。しかし、探偵の方法が現在の筆者の研究に有る程度影響を与えていることは否定できない。

たとえば、捜査に関し「現場 100 回」という言葉があるが、筆者はある歴史的事件を考察する際、必ずその場所を訪ねることにしている。そうすることにより、当事者の気持ちを少しでも知ることができれば、と考えるからである。

最初に、「なぜ」と言う疑問があり、それに基づき思考を重ね、場合によっては行為者の立場になり、論理的に進めていき、蹴る論に至る、という意味で探偵の作業と歴史家の作業には共通するものがある。最初の「なぜ」という問題意識が適切でないと、すべてが狂ってしまう。

多くの探偵小説では、犯人とされる人物が自殺したり、自供したりするから解決するのであるが、歴史ではそうは行かない。歴史的因果律をあくまでも蓋然性の問題として、真実性の割合の高い学説、低い学説といったものの存在を許すことができるのかもしれない。なお、荒唐無稽かもしれないが、量子力学的不確定性原理によると、物質を構成している素粒子自体の運動を可能性でしか把握できないわけで、この物質で構成されている世界も可能性でしか判断できない、といった結論を出す者もいるかもしれない。

ただ、筆者がここで主張したいのは、歴史は探偵小説とは異なり、犯

人や動機、殺害方法などがわかった後は、結論が出た過程は重要ではない、というわけにはいかない。それに、最終的には実際に見たわけではなく、やはり、歴史家が結論づけることができるのは、あくまでも可能性が高い、と歴史家が信じる学説、ということになる。では、事実、とはいっても事実の可能性が高いだけなのであるが、を積み重ねて、主観を排除する、ということに意味があるとは思えない。事実かどうかの判断にすでに主観が入り込んでいるのである。その基準のひとつとして、コリングウッドの言うように、行爲者の思想を探究することは、非常に大きな意義の有ることであると思う。複数有る未来の選択肢の中で、どれを選んだのか、といったことは行爲者の思想の問題である。

本書は、特に学校で歴史を学んだだけの読者に対し、大きなインパクトを与えるものであると思う。私たちは学校の歴史教科書に書かれている内容を真実であると錯覚している。特に、受験戦争を勝ち抜くために年代や事項を暗記する。そこに、その事件が本当にあったのかどうか、ということ考察する余地はない。もちろん、何かを考察するには、標準となる理論が必要であるから、学校での歴史学習は、一般人に対しても、歴史家になった人に対しても無駄ではない。しかし、本書を読むことで、教科書に書かれていることがすべて正しいわけではない、ということが理解できる功績は大きい。ただし、かといって岡田の理論が正しいとはいえないけれども、筆者がここで述べたとおりである。

ただ、人類は突然変異によって進化しているのではない。過去を知り、過去を受け止め、自分の力で、過去を乗り越えていく。そこに生命体としての意義があるというなら、過去を正しく認識することが未来への明るい展望に貢献できるのではないだろうか。

#参考文献

- 1 太田秀道『史学概論』(学生社、昭和40年)

- 2 中山治一『史学概論』(学陽書房、昭和 58 年)
- 3 ウィリアム.H.ドレイ著/神川正彦訳『歴史の哲学』(培風館、昭和 43 年)(Dray、*PHILOSOPHY OF History*)
- 4 太田秀道『歴史を学ぶ心』(大月書店、1982 年)
- 5 岡田英弘『歴史とは何か』(文藝春秋、平成 13 年)
- 6 鷺田小彌太『はじめての哲学史講義』(PHP 新書 204、2002 年)
- 7 色川大吉『歴史の方法』(大和書房、1981 年)
- 8 E.O.ライシャワー著、羽染竹一訳『近代史の新しい見方』(三陽社、昭和 49 年)(REISCHAUER、*A NEW LOOK AT MODERN HISTORY*)
- 9 日本歴史学会編『日本史研究の新視点』(吉川弘文館、昭和 61 年)
- 10 ゲオルク.G.イッガース著、早島瑛訳『20 世紀の歴史学』(晃洋書房、1996 年)(IGGERS、*GESCHICHTSWISSENSCHAFT IM 20.JAHRHUNDERT*)
- 11 『新しい歴史教科書』(扶桑社、平成 13 年)
- 12 伊藤潔『台湾』(中公新書、2000 年)
- 13 W.H.ウォルシュ著、神山四郎訳『歴史哲学』(創文社歴史学叢書、昭和 56 年)(WALSH *PHILOSOPHY OF HISTORY*)
- 14 コリングウッド『歴史の観念』(紀伊國屋書店、2002 年)